

2026 年（令和 8 年）度 海外帰国生徒入学試験（国際バカロレア等を含む）A 日程 問題

小 論 文

2025 年 10 月 19 日 実施

【解答上の注意】 答案は別紙解答用紙に、左横書きで書いてください。
この問題用紙の余白や裏面を下書きなどに利用してもかまいません。

《課題文》

孤立した知識がわからない状態になりにくいということは、その知識を所持している人間がその知識に関わる問題を考えなくて済む確率が高いということです。それは他者から見れば、知識の状態は必ずしも満足できるものではないにもかかわらず、本人としては知っているという感覚を持っている可能性も高くなります。

受験生が、数学の参考書のある章の解説を読み、例題や章末の問題を解いて、その領域をマスターしたと思ったとすれば、かなり安易な姿勢です。実際の試験では、どの領域の問題か一見してわからないものはいくらもあります。問題が参考書のどの章にあるのかが、すでにヒントになっているのですから、慎重な受験生は、ヒントがなくても自分は解けるだろうかと、自分をわざとノーヒントの危険な状況に置いたりします。これなども、わからない状態が学習を進めるという例です。

また、老練な教師は知ってるつもりになっている子どもたちに、「ゆさぶり」をかけて、わざと「わからない状態」にすることがよくあります。足し算や引き算の筆算を「なぜ下の位からやるのか」とか、ミカン 7 個とリンゴ 5 個の差を $7-5$ と簡単に引き算する子どもに、「引き算は取るということでしたね。ミカンからリンゴは取れるのですか」などとゆさぶるのです。

わからなくさせられた子どもたちが、納得のいくように知識システムを整備できればわかり方は格段に進展します。うまくすれば「僕知ってる」といった勉強に対する安易な姿勢も影を潜めるようになります。「知に対して謙虚」になる感じもあります。子どもたちが自力で「わからなくなれない」のであれば、教師がその代理をするというのが、「ゆさぶり」という教育行為なのかなと思います。

このように、わからなくなれるというのは、私たちの知識システムの進展に関して欠くべからざるものです。わからない状態というのは、知っていることを用いて、知らないことを見いだしたり、矛盾を見つけてしまった状態です。ですから、(中略) ピンポイントのわからない状態というのは私たちの既知のすぐそばにしかないのです。既知と未知とが接している境界で初めてわからない状態が起きるのです。その外側には、私たちがわからないとか、知らないとかと思ったことがない世界が広がっているのです。

わからないとか知らないと思える場所は既知のすぐ外側です。しかし、この既知のそばであれば、そこでわからないとか知らないと自動的に思えるかということそうではありません。既知の知識を駆使してわからない状態、知らないと思える状態を積極的に作らなければならないのです。孤立した知識はシステムを成していないので、わからない状態や知らない状態を作れるほどに知識を駆使するのは非常に困難です。一般的には無理です。

知識の少ない人、有機的に知識が繋がっていない人は、疑問が少ないのです。

(西林克彦著『知ってるつもり』より)

《問 題》

課題文を読み、以下の指示にしたがって答えなさい。

著者の主張を踏まえた上で、「わからない状態」を意図的に作ることは、大学での学びにおいて有効かどうかについて、あなたの経験を踏まえて述べなさい。